

IV 水稻「つきあかり」の特性と栽培上のポイント

1 来歴

「つきあかり」は、中央農業総合研究センター北陸研究センター（現 中央農業研究センター北陸研究拠点）において、宮崎県の在来品種「かばしこ（ジーンバンク JP10698）」を母とし、「北陸 200 号」を父とした人工交配を行い、さらに、その F1 を母に、「北陸 208 号」を父として三系交配を行って選抜・育成され、2016 年に品種登録出願・公表された。

2 特性

第1表 「つきあかり」の特性表

項 目		つきあかり	ハナエチゼン
1 熟期	出穂期(月.日)	7.16	7.13
	成熟期(月.日)	8.17	8.13
2 草型	稈長(cm)	78.9	77.9
	穂長(cm)	19.9	18.4
	穂数(本/m ²)	382	511
	草型	偏穂重型	偏穂数型
3 安全性	倒伏程度	0.7	0.0
	葉いもち	強	強
	穂いもち	やや強	やや強
	穂発芽性	難	難
	耐冷性	強	やや強
	高温登熟性	やや強	やや強
4 収量性	収量(kg/10a)	684	598
	比較比率(%)	114	100
	千粒重(g)	24.0	23.4
5 品質	検査等級	3等上	1等下
	整粒比率(%)	66.1	79.3
	白未熟粒比率(%)	7.7	5.5
6 食味値	蛋白質(DW%)	8.3	9.1
	アミロース(%)	16.9	17.2
	食味値	69	66
7 食味官能評価 (総合評価)	ハナエチゼン対比	+0.47	0.0
	コシヒカリ対比	+0.42	0.0

注 1 データは令和元年～4年の農業技術センターにおける4月下旬移植試験の4カ年の平均値

2 倒伏程度は、0(無)～5(甚)の6段階

3 葉いもち、穂いもち、穂発芽性、耐冷性は下赤名ほ場(標高444m)における成績

4 収量の比較比率はハナエチゼンの収量を100とした比率

5 検査等級は日本穀物検定協会による1等上～3等下、規格外の10段階評価

6 整粒比率及び白未熟粒比率は穀粒判別器(サタケ社)による玄米2,000粒の測定値

7 食味値は食味分析計(静岡製機社)による玄米の測定値

8 食味官能値はハナエチゼン及びコシヒカリを基準品種とした相対評価値

- ・出穂期及び成熟期は「ハナエチゼン」よりやや遅い極早生品種である。
- ・草型は“偏穂重型”で、止葉が長く葉が直立し受光態勢が良好である。稈長は「ハナエチゼン」と同程度～やや長く、穂長は長く、穂数は少ない。
- ・耐倒伏性は「ハナエチゼン」に劣る。
- ・葉いもち圃場抵抗性は“強”で「ハナエチゼン」と同程度。
- ・穂いもち圃場抵抗性は“やや強”で「ハナエチゼン」と同程度。
- ・穂発芽性は“難”で「ハナエチゼン」と同程度。
- ・耐冷性は“強”で「ハナエチゼン」よりやや強く、高温登熟性は“やや強”で「ハナエチゼン」と同程度。
- ・収量性は「ハナエチゼン」より高く、千粒重は重く大粒。
- ・玄米の外観品質は「ハナエチゼン」に劣り、白未熟粒の発生はやや多い。
- ・玄米タンパク質含有率は「ハナエチゼン」に比べやや低く、食味スコアは高い。
- ・食味官能評価は「ハナエチゼン」及び「コシヒカリ」より高く良食味。

3 栽培管理のポイント

(1) 普及適用地域

- ・土壌養分が肥沃な地域に適する。
- ・熟期が早いいため中山間地～平坦部で栽培が可能である。

(2) 栽培適期

早植栽培（4月下旬～5月上旬移植、8月中旬～下旬収穫）に適する。

(3) 土づくり

堆肥等有機物や土づくり資材の施用、深耕、稲わらの腐熟促進対策に努める。

(4) 育苗

- ・種子更新は毎年行う。
- ・種子消毒剤や温湯消毒による種子消毒を行う（無消毒種子の場合）。
- ・種子休眠が深い場合があるので、浸種時間を充分確保する。
- ・浸種の積算温度の目安は100℃、ただし水温が15℃以上になると発芽が始まり不揃いになることがあるので浸種水温は12～13℃とする。
- ・催芽は、30℃で24時間程度を目安とし、鳩胸状態を確認する。
- ・1箱当たりの播種量は、稚苗の場合乾籾で120～140gとする。
- ・育苗初期（出芽～緑化期）の温度が高いと、軟弱徒長苗になるので注意する。
- ・「つきあかり」は通常伸びない中胚軸（以下メソコチルと表記）が伸びやすく、出芽の際、長い期間育苗器内などで積み重ねるとメソコチルが異常に伸長することがあるので、観察し適切な時期にハウス内等に並べる（一番上の箱はメソコチルが比較的伸びない）。
- ・メソコチルが伸長すると苗のマット強度が低下し、ばらけやすくなるので移植時の手さばき（ハンドリング）が悪くなるばかりか、欠株が増加する。



図1 メソコチルが伸びた苗

(5) 移植

- ・移植時期は、4月下旬～5月上旬頃とする。
この場合、出穂期は7月中旬～下旬、成熟期は8月中旬～下旬頃となる。
- ・栽植密度は、60株/坪（株間18cm、条間30cm）を基準とし、極端な疎植は避ける。
- ・1株植付本数は、3～4本/株
- ・極端な浅植や深植は避ける。

(6) 施肥管理

1) 体系施肥

- ・基肥：窒素成分で3～4kg/10a。
- ・穂肥：出穂25日前と15日前に、それぞれ窒素成分で2.0kg/10aを施用。

第1表 窒素施用量（Nkg/10a：上段）と施用時期（出穂前日数：下段）の目安

基肥	穂肥		計
	1回目	2回目	
3～4	2.0	2.0	7～8
	25日	10日	

2) 一発施肥

- 窒素成分で8kg/10a（リン産5～8kg/10a、カリ5～7kg/10a）程度施用する。
※過度な多肥栽培は倒伏や層米の増加が発生するため、適切な肥培管理を行う。

(7) 農薬散布（雑草防除、病虫害防除）

1) 雑草防除

- ・除草剤を使用する場合は、雑草の発生状況を見て適期に散布する。

2) 病虫害防除

- ・地域の病虫害発生状況を考慮して、効果的な防除計画を立てる。
ただし、病虫害が多発した場合は、農薬の使用回数に注意して適切な防除を行う。
出穂が早い場合カメムシ被害等に留意する。

(8) 水管理

- ・穂数を確保するために、過度な中干しは行わずに間断灌水に努める。
- ・出穂後20日頃までは間断かん水を継続して登熟促進を図る。早期に完全落水をしない。
- ・その他は基本的な水管理を徹底する。

(9) 収穫

- ・収穫時期は、青味初率10～15%になった時を適期とする。
- ・登熟積算温度900～1000℃程度をおおよその目安とする。

(10) 乾燥・調製

- ・乾燥は、胴割米の発生に注意し、水分15%に仕上げる。
- ・ライスグレーダー（1.9mm選別ふるい目）等による適正な調製を行う。